

# 19世紀日本の風景：錦絵にみる経済と世相

—米国 FRB 美術品展示会より—

2017年10月14日(土)～12月3日(日)

## ごあいさつ

今般、2015年11月の貨幣博物館リニューアル後、初の企画展として、「19世紀日本の風景：錦絵にみる経済と世相—米国 FRB 美術品展示会より—」を開催することといたしました。

米国 FRB (連邦準備制度理事会) では、ワシントン D.C.にある FRB の本館内で、美術品の展示会を随時開催しています。時には他国の中央銀行と協力して展示会が企画されており、2014年秋にはアジアの中央銀行として初めて日本銀行との共催により展示会“Japan’s Social & Economic Landscape: Nineteenth-Century Woodblock Prints from the Currency Museum, Bank of Japan”が開催されました。

貨幣博物館所蔵資料の中から厳選された錦絵46点が展示され、錦絵でみる幕末から日本銀行設立までの貨幣・経済史や、芝居絵などの日本の風俗・文化、さらには大黒天など幸福と富を願う縁起物など、美しい錦絵の展示会は多くの人を魅了しました。

今回の企画展では、FRB との共催展示会に出展した錦絵全点を展示いたします。貨幣博物館30年の歴史の上で初めて海を渡った錦絵の魅力を、実感していただければ幸いです。

日本銀行金融研究所貨幣博物館

## Part. 1 幕末開港から日本銀行設立へ —貨幣・社会経済史—

江戸時代から幕末開港、明治維新を経て日本銀行が設立される頃までの貨幣・経済に関する錦絵を展示しています。開港以降の貨幣・経済の混乱や新しい貨幣制度は風刺画の題材となり、また西洋の影響を受けて新築された建物は名所となり、いずれも広く錦絵に描かれました。

### 《主な展示作品》

#### 品定開化花 守川周重 / 1879年

日本の伝統的な品物と、開港後の「文明開化」によって新しく導入された品物を持っている人々を、歌舞伎役者に見立てて描いた錦絵。

「せつた」(雪駄)と「くつ」(靴)などと並び、江戸時代の「天保せん」と明治時代の「銅貨」、江戸時代の「銀貨」と明治時代の「さつ」(政府紙幣)も対比して描かれている。それぞれには書入れ(セリフ)がある。左手に政府紙幣を持って見得を切る「さつ」には「銀でもきんでもおどろかねへ せかいごぞって(こそって、の意) さつの通用」とあり、全国通用の政府紙幣が使われるようになったことを示している。



#### 欲の戯ちから競 児玉又七 / 1880年

首引きという遊びの場面を描いている。役人姿の政府紙幣(明治通宝札、左)が、どっしり構えた米俵(右)に引っぱられ、当時の紙幣価値の下落と物価上昇を風刺している。劣勢の政府紙幣を支えようとしているのは役人風の格好をした政府発行の金属貨幣である。

1877年に西南戦争が起り、戦費の支出のため政府は大量の不換紙幣を発行した。その後、政府紙幣の価値が下落して、同額面の金属貨幣との間に価値の乖離が生じた。これに対して、政府は紙幣価値の安定化を目指して政府紙幣の回収に努めるとともに、中央銀行として日本銀行を創設することになる。



不二詣諸品下山之図 三代歌川広重 (立齋) / 1883 年



(部分) 下山する人々と、転げ落ちる人。笠には右から「太物」、「唐物」、「洋銀」とある。

西南戦争後のインフレを抑制するため、1881 年から大蔵卿松方正義により不換紙幣の回収と緊縮政策が採られた。これによりインフレは収束したが、同時に不景気がおとずれ、中小農民の生活が苦しくなるなど社会は混乱した。この作品は当時の状況を富士山の下山になぞらえて描いている。

行者姿の人々が被っている笠には価格が下落した食品や衣類などの品名が書かれている。転んだり、気分が悪くなったりしている人もいる。外国貨幣も転げ落ちる様子が裾野に描かれ、外国人がその様子を気球から眺め「洋銀下る誠に困る」と述べている。

一方で、上部では歌舞伎役者が山頂を目指している。彼らの書入れには「此節、諸式 (諸色) の下る中で、一ト芝居半日で千二百五十円の給金と八、なんとこふせいツカモノネ」とあり、物価下落の中、役者の給金は高額であったことが示唆されている。

大日本帝国政府日本銀行全景 三代歌川国貞 / 1896 年

日本銀行本店本館 (重要文化財) は、日本の国家的近代建築としては最初の建物で、辰野金吾の設計により 1896 年に竣工した。辰野は設計に先立ち、アメリカの主要都市やヨーロッパ各国の銀行を訪問・調査し、特にベルギーの中央銀行を参考にした。

建物の構造は、分厚く打たれたコンクリート基盤の上に建てられた石積み煉瓦造りで、地上 3 階地下 1 階建てとなっている。外側の石は 1 階に花崗岩 (北木石)、2・3 階に安山岩 (白丁場石) が積まれている。

本館の後ろ (北側) には同時に竣工した西分館や煙突も描かれている。本店が建てられた東京の日本橋本石町は、江戸時代には金座があった場所である。周りには多くの金融機関があり、川を隔てて大蔵省本省や紙幣寮もあった。

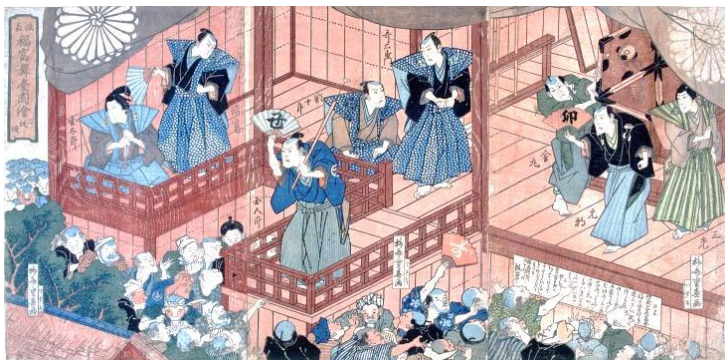


Part. 2 錦絵にみる江戸時代の風俗

歌舞伎の場面や役者を描いた錦絵、江戸の様子、着物など、江戸時代の風俗が描かれた錦絵を展示しています。歌舞伎のストーリーには貨幣や財布が出てくる場面が多く、錦絵にはそうした場面が描かれています。

《主な展示作品》

浪花福富舞臺図絵 柳斎重春 / 19 世紀前半



江戸時代の富 (「富くじ」) 興行を歌舞伎の舞台に見立て描いている。幕府は、富は賭博の側面が強いとし、禁止や統制の対象とした。富興行は寺社が建物の修復の財源とするために、幕府の許可を得て主催することが多かった。

富札 (番号入りの紙札) を発売し、抽選の際、番号の書かれた木札を箱に入れ、箱の小穴から錐で木札を突いて当選番号を決め、賞金を支払った。



画中右には抽選用の木箱、中央の人の左手の錐の先には当選番号の木札が描かれている。舞台の下には当選を願い集まった多くの人々が描かれ、右下の貼り紙には「この錦絵を家に貼って富札を買えば当選する」と書かれている。

柳斎重春は有名な大坂の絵師。錦絵は江戸で多く作られたが、役者絵を中心として大坂や京都でも作られ、上方絵とよばれた。

(部分) 錐の先端には、当選番号の木札が刺さっている。

**大井川徒行渡図** 豊原国周 / 1860年

大井川（現静岡県）を渡る人々の様子。輦台や駕籠で渡る女性、肩車で渡る女性や旅行者の荷物を運ぶために渡る人足達が描かれている。川岸では人足が暖をとっている。右手が東、左手が西で、右手奥には富士山が描かれている。

川幅は広がったが、技術的な問題や防衛上の理由などから架橋されず、旅行者は人足に担がれて川を渡った。川越の料金は、その時の水位により決められ、また肩車による渡しが基本で、中央の女性2人のように輦台に乗ると、多くの人足が必要なことなどから料金が高くなった。氾濫の多い大井川は、悪天候が続くと水位が増して渡れず、旅人は何日も足留めされ、東海道最大の難所と言われていた。



**馬切り 三七郎信幸** 豊原国周 / 19世紀後半

歌舞伎の一場面、通称「馬切り」とよばれる。初代中村宗十郎扮する三七郎（中央）が大坂で馬子を切り捨て、高野山へ献上する千両箱3つ（3,000両）の載った馬を奪い、それを捕手達が囲んでいる。



もとは歌舞伎「傾城青陽鷄」の一部で、この場面が独立して上演された。取り囲んだ捕手を尻目に、小判を積んだ馬を引いて立ち去る三七郎の颯爽とした姿が見物で、この場面は錦絵に多く描かれた。取り囲む捕手は右から市川新十郎、中村相蔵、三代目市川市十郎、三代目片岡我童、中村銀之助、三代目片岡我當。

三七郎の黒い着物には「正面摺り」という技法が用いられており、違う角度から見ると光の反射具合によって着物の柄である紗綾形が浮かび上がる。

**Part. 3 幸福・富を願う 一福神絵一**

幸福をもたらすとして信仰されてきた福神を描いた錦絵を展示しています。七福神は縁起が良いこと、めでたいことの象徴として、絵画や彫刻の題材とされたほか、七福神が祀られている神社へ参詣するなど、その信仰は江戸時代に広く普及しました。

《主な展示作品》

**四海波 福の神あそび** 池田英泉 / 19世紀前半

四方の海が穏やかな中、大黒天・恵比須が漁に出て、網に大量の小判がかかる様子が描かれ、その様子が謡曲「高砂」の一節の表現を変え「四海なみ 静けき 福の神 あそび こがねも あみに かかる 目出たさ」と詠まれている。

絵師の池田英泉は、最初日本画の最大の画派である狩野派に学んだが、後に浮世絵に転じた。英泉は文献の執筆も行い、浮世絵の絵師や作風に関する著作は、現在でも浮世絵に関する基本的な文献として評価が高い。



**福神 蚕の糸取** 松浦守義 / 19世紀後半

養蚕の様子が大黒天と共に描かれ、床には小判が散らばっている。手前の左の女性が持っているのは蚕卵紙。1840～50年代にかけてヨーロッパで蚕病が流行し、蚕卵紙は幕末～明治時代初期にかけ日本の重要輸出品の一つとなった。奥では女性が生糸を取っている。当時、養蚕が富をもたらしており帳簿を前にした福神が小判と共に描かれたのであろう。

この作品は富山の売薬商人が得意先に景品として配った売薬版画で、小型の作品は無料で配られた。松浦守義は富山の絵師で富山藩にも仕えたが、幕末から明治にかけて、売薬版画を手掛けた。売薬版画は、江戸の錦絵のデザインを取り入れ、江戸の文化を地方に広げる役割も果たした。



## 出品目録

No.	作品名	制作年代	作者
1	岩城升屋店前之図	1850年頃	初代歌川広重
2	王子稻荷参詣群集之図	19世紀前半	三代歌川豊国(国貞)
3	諸国金山ノ図	1860(万延元)年	初代歌川芳豊
4	古金銀貨一覽表	1889(明治22)年	歌川国利
5	誉大尽金の豆蒔 紀文大尽	1866(慶応2)年	豊原国周
6	豊国漫画図絵 岩淵彌七	1860(万延元)年	三代歌川豊国
7	和田しづま 尾上松助	19世紀前半	三代歌川豊国(国貞)
8	横濱繁栄之図	1865(慶応元)年	二代歌川広重
9	樹上商易諸物引下図	1865(慶応元)年	三代歌川広重(重政)
10	マケロマケヌ 賣買大合戦	1861(文久元)年	落合芳幾
11	浪花川崎鑄造場之図	19世紀後半	二代長谷川貞信(小信)
12	浪花名所之内川崎造幣局	19世紀後半	二代長谷川貞信(小信)
13	明治新貨幣と両替屋	19世紀後半	作者不詳
14	東京築地保互留館繁栄之図	1870(明治3)年	二代歌川国輝
15	東京品川鉄道蒸気発車之図	1873(明治6)年	三代歌川広重
16	海運橋為換座之図	1872(明治5)年	昇斎一景
17	品定開化花	1879(明治12)年	守川周重
18	東京駿河衛国立銀行繁栄図	1874(明治7)年	三代歌川広重
19	東京名所常磐橋内紙幣寮新建之図	1877(明治10)年	三代歌川広重
20	欲の戯ちから競	1880(明治13)年	児玉又七
21	不二詣諸品下山之図	1883(明治16)年	三代歌川広重(立斎)
22	江戸橋ヨリ鐙橋遠景	1888(明治21)年	井上安治(探景)
23	永代橋際日本銀行の雪	19世紀後半	井上安治(安次)
24	大日本帝国政府日本銀行全景	1896(明治29)年	三代歌川国貞
25	日本銀行落成之図	1896(明治29)年	篠原清興
26	十二月ノ内霜月酉のまち	1854(安政元)年	三代歌川豊国
27	浪花福富舞臺図絵	19世紀前半	柳斎重春
28	春色花の魁	19世紀半ば	三代歌川豊国
29	當勢和歌参人	1857(安政4)年	三代歌川豊国
30	大井川徒行渡図	1860(万延元)年	豊原国周
31	吾孀下五十三駅 大井川	1854(安政元)年	三代歌川豊国
32	与話情浮名横櫛 向疵乃与三 こうもり安	1853(嘉永6)年	三代歌川豊国
33	与話情浮名横櫛 井澄屋 向疵乃与三	1853(嘉永6)年	三代歌川豊国
34	馬切り 三七郎信幸	19世紀後半	豊原国周
35	木曾街道六十九次之内 草津 冠者義高	1853(嘉永6)年	歌川国芳
36	木曾街道六十九次之内 奈良井 おろく 善吉	1852(嘉永5)年	歌川国芳
37	東海道五十三次の内 藤川駅 佐々木藤三郎	1852(嘉永5)年	三代歌川豊国
38	肴や喜三郎 坂東三津五郎	19世紀初め	初代歌川豊国
39	七福神 宝の参宮	1863(文久3)年	歌川芳虎
40	福神 黄金の巻狩	1865(慶応元)年	歌川芳虎
41	讃州象頭山真景	1829年頃	作者不詳
42	四海波 福の神あそび	19世紀前半	池田英泉
43	奥州松島風景 福神丸	19世紀前半	歌川国芳
44	福神 蚕の糸取	19世紀後半	松浦守義
45	千代乃寿 目出度づくし	1858(安政5)年	落合芳幾
46	七福神宝の入船	1878(明治11)年	三代歌川広重